

# 学生の就業体験後押し

ふるさとといわて創造協

県内の4大学と一関高専、東京都の杏林大が県内16市町や産業関係者と連携して組織したふるさとといわて創造協議会(会長・岩淵明岩手大学長)は、大学生の就業体験(インターンシップ)に力を入れている。学生と経営者が共に取り組む実践型の就業体験を増やし、地域の魅力ある企業の発見や進路選択の判断基準としての活用を期待。若者の地元定着を目指している。

矢巾町出身で、東京都の明星大理工学部2年の中田将太さんは2月、釜石市両石町で海鮮中華まんじゅうの「釜石海まん」を販売するKAMAROK(カマロク、中村博充社長)で就業体験を開始。大学を休学して1年間仕事を体

## 実践型、企業選択に幅 若者の地元定着目指す



経営者と共に会議に参加する  
中田将太さん(右から2人目)

験する。  
納品や発注、あいさつ回りなどの経験を積み、現在は中村社長の「右腕」として新商品の開発を任されている。

原料の仕入れやデザインの委託などを1人で行っており、「地方には就職先が無いと聞くと、長期間企業で就業体験することで、地域の魅力

や会社経営についてなど多くの発見がある」と意義を語る。中田さんは「起業して地域を盛り上げたい」という思いから、同協議会が本年度スタートした「ふるさとといわて創造プロジェクト」で支援する大船渡市のNPO法人wiz(ウィズ)を通じて就業体験を希望。創業2年目の同社を選んだ。

このほか、県立大が中心となり、東北地方に特化した就業体験紹介のインターネットサイトを運用しており、県内では369人が参加している。

文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COCプラス)」に採択されている、岩手大の船場ひさおCOC推進室特任准教授は「学生のニーズに合わせて、地元の学生に地元を知ってもらえる多様なインターンシップを提供していきたい」と語る。